

大分県聖岳洞穴出土の石器

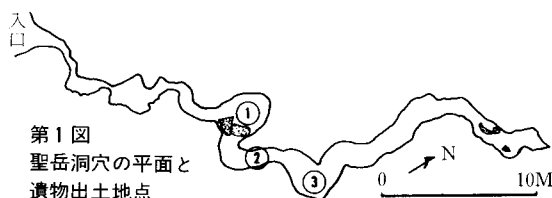
橋 昌 信

1. 聖岳洞穴の調査

聖岳洞穴の調査は昭和37年、洞穴遺跡特別調査委員会で計画され、別府大学賀川光夫・新潟大学小片保の両教授らによって実施された。洞穴から旧石器時代の石器群と共にその時代の化石人骨が発見された。日本の旧石器時代の遺跡の中であって、化石化した人骨と石器が共伴した貴重な遺跡にもかかわらず、必ずしもそれにふさわしい評価がなされていないようである。そこで、聖岳洞穴出土石器群について改めて紹介を行ない、若干の考察を加えることにしたい。

(註1)
立 地 大分県の南部である臼杵・津久見・佐伯の県南と宮崎県の境をなす祖母・傾山系の北側の一帯は石灰岩が発達した地域であり、各所に鐘乳洞が存在している。聖岳洞穴もこれらの鐘乳洞の一つであり、県南最大の河川である番匠川の一支流の山あい位置する。標高は約250mで、番匠川の支流との比高はおよそ190mである。

洞穴の平面 洞穴は西南に向いて開口し、全長45.5m（入口からの直線距離は35m）の細長い石灰岩の洞穴である。遺物の出土した場所は複雑に曲りくねっている洞穴の屈曲部の比較的広くなった場所で、化石化した頭蓋骨などが発見された第1地点は入口からの直線距離（以下同じ）は15mである。石器類が出土した第2地点は距離的にはほぼ同じであり、一番奥のやはり石器類が出土した第3地点はやや離れ19mを計ることができる。



第1図
聖岳洞穴の平面と
遺物出土地点

層 位 洞穴内の土層の堆積は三層に大別されている。第I層は10~15cmの厚さの粒子の細かな黒色土層。第II層は粘質で砂・砂礫を含む層で厚さは15~25cm。第III層は粒子の細かな粘土質の層であり、その堆積は2m以上あると思われるが不明である。この層序のうちで、旧石器時代の石器群は第III層中から出土している。第1地点で発見された頭蓋骨・距骨・腰椎などもやはり第III中である。第II層は全くの無遺物層である。第I層中からは多くの人骨片や宋銭・金属片など中世以後の遺物が出土しており、旧石器時代以後も何らかの形でこの洞穴が利用されていることがわかる。

2. 聖岳洞穴出土の石器群

聖岳洞穴から全部で26点の石器群が出土している。石材はすべて黒色で良質な黒曜石に限られている。これらの黒曜石の一部は自然面の状態や断口の色調・透明度など肉眼的な観察による限り、佐賀県伊万里市の腰岳産と考えられる。石器の組成は細石刃・細石核、台形様石器、二次加工・使用痕のある剥片、それに小石核などである。以下、実測図にしたがってそれらについて述べてみる。

1~6は細石刃である。九州で普遍的に見ら

れる細石刃に比較して、やや大ぶりのものがめだち、特に幅において顕著である。しかも大形の4点はいずれも使用によると考えられる刃こぼれや擦痕が観察される。1は基部と末端部が意識的に折断したと考えられるいわゆる中間部で、a面の稜線の右側部分とb面の左側の約1/2に側辺と並行な擦痕が明瞭に観察され、a面右側の稜線上とb面の中央にも、部分的に認められる。2は特に大形の細石刃で打面と末端がカットされている中間部である。b面の左側側辺に沿って使用によると考えられる小さな剝離が並んでおり、しかもそれらの一つ一つの剝離面の稜は丸味をおびている。3はa面の左側に自然面を残しているが、打面と末端は折断されている。一側縁の両面とb面の左側縁に刃こぼれが認められる。また、b面の中央に輪郭が不鮮明な細長いくすんだ光沢が不規則な状態で観察される。4は細石刃の中間部で、a面の一側辺は細長く自然面を残している。b面の左側の側辺すなわちa面で自然面を有している縁辺は磨滅して丸味をおびている。また、逆の一辺の上端近くにのみ小さな剝離がみられる。5は細石刃剝離作業での初期の段階の考えられる細石刃である。6は細石刃としてはやや不規則な形をしているが、側辺の一部に小さな剝離が認められる。

7は当洞穴出土の唯一の細石核である。全体の形状はやや扁平な角柱状を呈しており、正面とその両側面にかけて、細石刃の剝離作業面が残されている。両側面の細石刃剝離作業面はそれぞれ上端から大きな剝離が施されている。また、この細石核の作業面よりの打面と下端は後世の二次的な剝離を受けており、他の面の風化と異なっている。打面の背面近くの部分は正面から背面に向かって傾斜しており細石核本来の打面を残している。背面は大きく平坦な自然面で

形成されている。

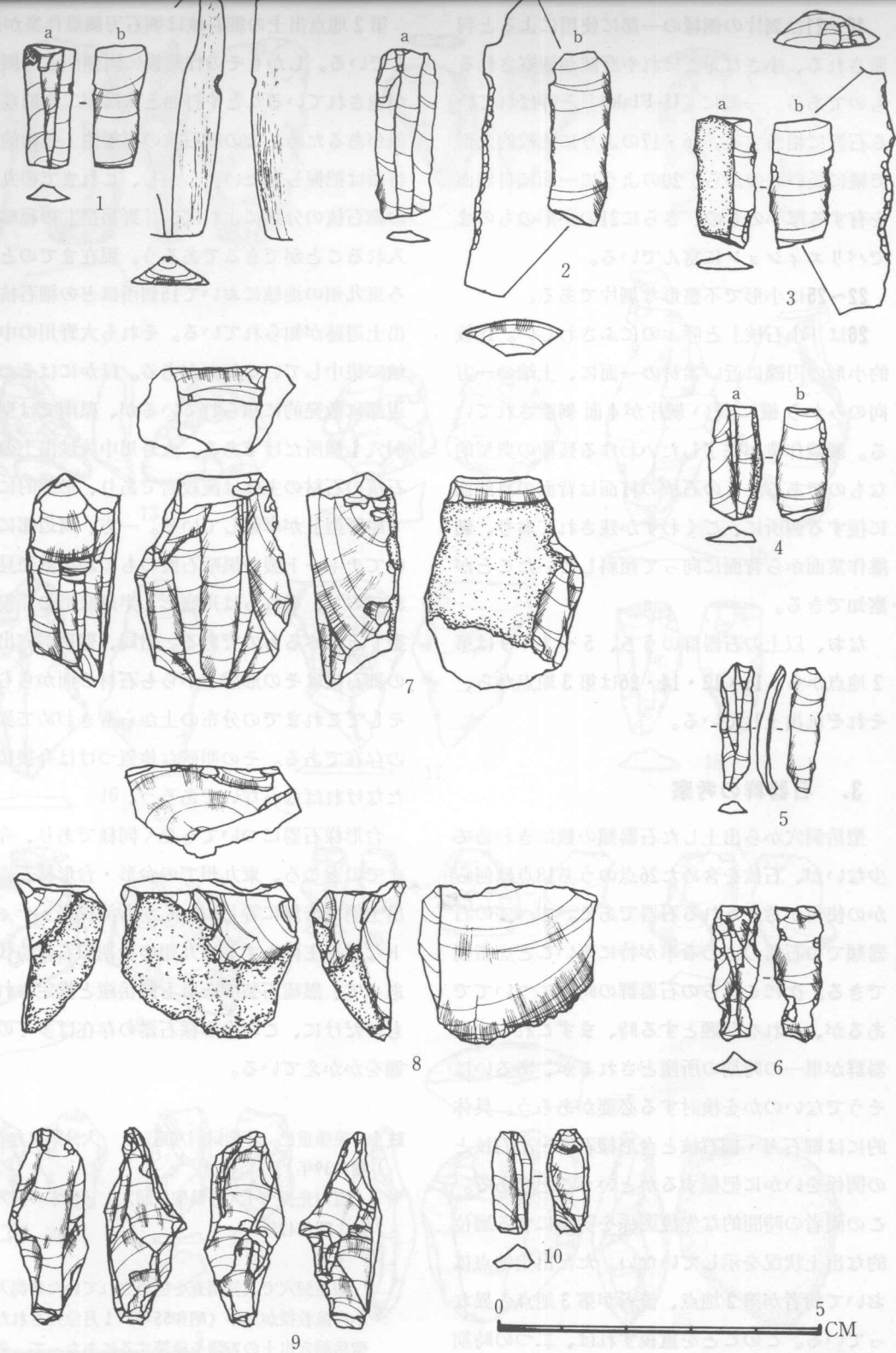
8は原礫から剝離された比較的厚手の剝片で、打面よりの一端はa面からの一回の大きな剝離面で形成される。両側面およびa面の一部にも剝離が施されている。形態的には小さいが細石核の素材か、あるいは何か別の石器の未成品かの両方が考えられよう。

9は両端が細くなった不正形な角柱状で、各面には上端・下端それに中央の凸起した箇所から、細長い剝離が施されている石器である。器種を明確にし得ないが、両端が尖り気味なことと若干の磨滅痕が観察されることから「くさび形石器」としておく。

10は細石刃よりさらに小さい石器で、両面ともに上・下端からのきわめて細い極状剝離が認められるが、いかなる石器か不明である。

11は横に長い、やや大形の剝片を素材に用いた台形様石器である。二次加工の調整はこの剝片の打面側の一辺とその逆の一辺に主要剝離面(b面)の方向からナイフ形石器に特徴的なブラントニング加工が90度に近い角度で丹念に施されている。刃部と考えられる素材の剝片が薄くなっている一辺は幾分傾斜しており、逆の一端は自然面を残している。基部と考えられるこの部分のb面では一部のナイフ形石器にみられる両側辺からの平坦な剝離が行なわれている。

12~15は二次加工のある剝片として一括され得る石器であるが、12・13と14・15では異なっている。前者は薄手で縦に長い剝片を素材にしており、二次加工は縁辺に集中して施されている。12は両側辺の二次加工によって打面と反対の一端をとがらせているのに対し、13は打面に接する両側辺に主として加工を行なってとがった一端を形成している。後者はやや横に長い厚手の剝片を用い、加工は側辺から面へと広がっているが全体的にやや粗雑な印象を受ける。



第2図 聖岳洞穴出土の石器 (細石刃・細石核・他)

16~21は剥片の側縁の一部に使用によると判断される、小さな刃こぼれや磨滅が観察されるものである。一般に「U-Flake」と呼ばれている石器に相当する。16・17のように比較的大形で縦に長いものから、20のように一面に自然面を有する厚手のもの、さらに21の小形のものまでバリエーションに富んでいる。

22~25は小形で不整形な剥片である。

26は「小石核」と呼ぶのにふさわしい。比較的小形の円礫に近い素材の一面に、上端の一方向のみから縦に長い剥片が4面剥離されている。剥離作業が完了したいわゆる残核の典型的なものである。この石核の打面は背面の自然面に接する個所に、ごくわずか残されており、剥離作業面から背面に向かって傾斜していたことが察知できる。

なお、以上の石器群のうち、5~7・9は第2地点から、11・12・14・26は第3地点から、それぞれ出土している。

3. 石器群の考察

聖岳洞穴から出土した石器類の数はきわめて少ないが、石核を含めた26点のうち18点は何らかの使用が考えられる石器である。すべての石器類での石器の占める率が特に高いことを指摘できる。次にこれらの石器群の時期についてであるが、これを問題とする時、まずこれらの石器群が単一の時期の所産とされるか、あるいはそうでないかを検討する必要がある。具体的には細石刃・細石核と台形様石器・小石核との関係をいかに把握するかということである。この両者の時間的な先後関係を明かにする層位的な出土状況を示していない。ただ出土地点において前者が第2地点、後者が第3地点と異なっている。このことを重視すれば、二つの時期を想定することが可能となる。

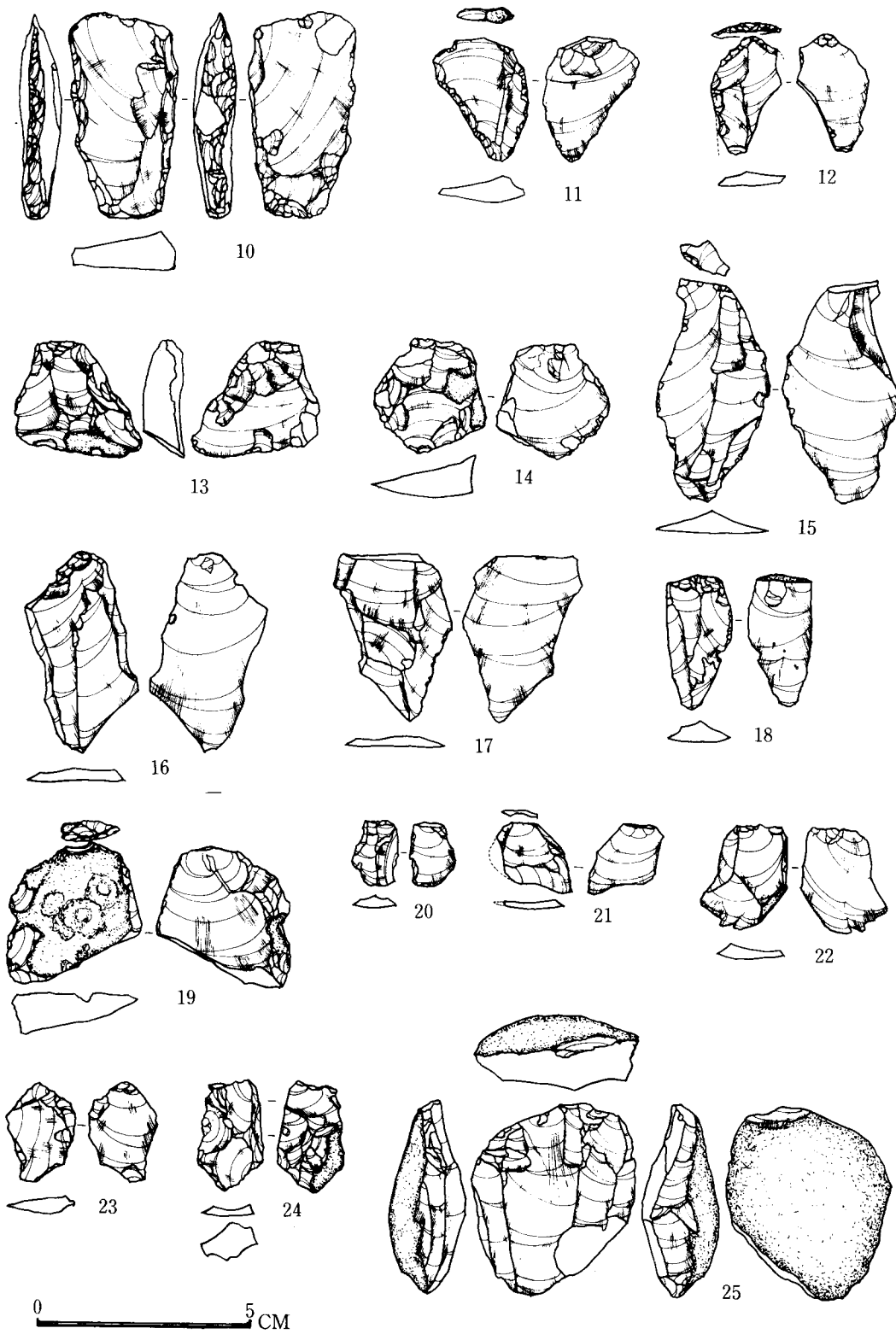
第2地点出土の細石核は細石刃剥離作業が進んでいる。しかもその作業後に両側面とも剥離が施されていることや打面と末端が二次的な欠損があるため、この細石核の形態的・技術的な特徴は把握しがたい。しかし、これまでの九州の細石核の分類によれば、「野岳型」の範疇に入れることができるであろう。現在までのところ東九州の地域において15箇所ほどの細石核の出土遺跡が知られている。それも大野川の中流域に集中している傾向がある。ほかにはその周辺部に散発的に知られているが、県南では聖岳洞穴1箇所だけである。大野川中流域出土の細石核の石材の主体は流紋岩であり、形態的には「船野型」が卓越している。一方、周辺部においてチャート製や黒曜石製のものが少数発見されており、それらは舟底形・半舟底形の「福井型」と呼べるものである。結局、聖岳洞穴出土の細石核はその形態上からも石材の面からも、そしてこれまでの分布の上からもきわめて異質の存在である。その明確な位置づけは今後にまたなければならぬであろう。

台形様石器についても全く同様であり、今までのところ、東九州での台形・台形様石器の出土例は皆無に等しい。しかも流紋岩・チャートなどを主体とする東九州の後期旧石器時代において、黒曜石製でそれも腰岳産と推定されるものだけに、この台形様石器の存在は多くの問題をかかえている。

註1 後藤重巳 「聖岳洞穴遺跡」 大分県地方史34 昭和39年

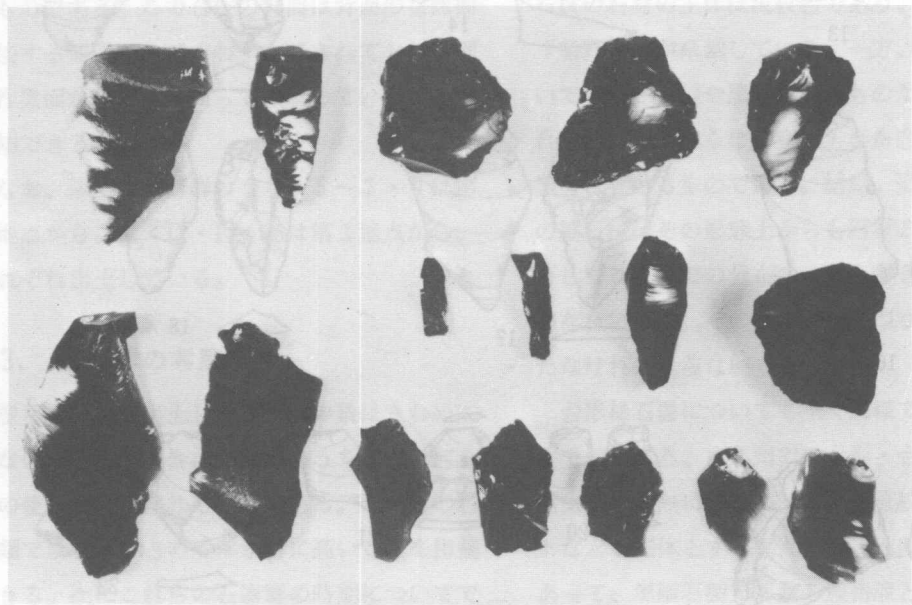
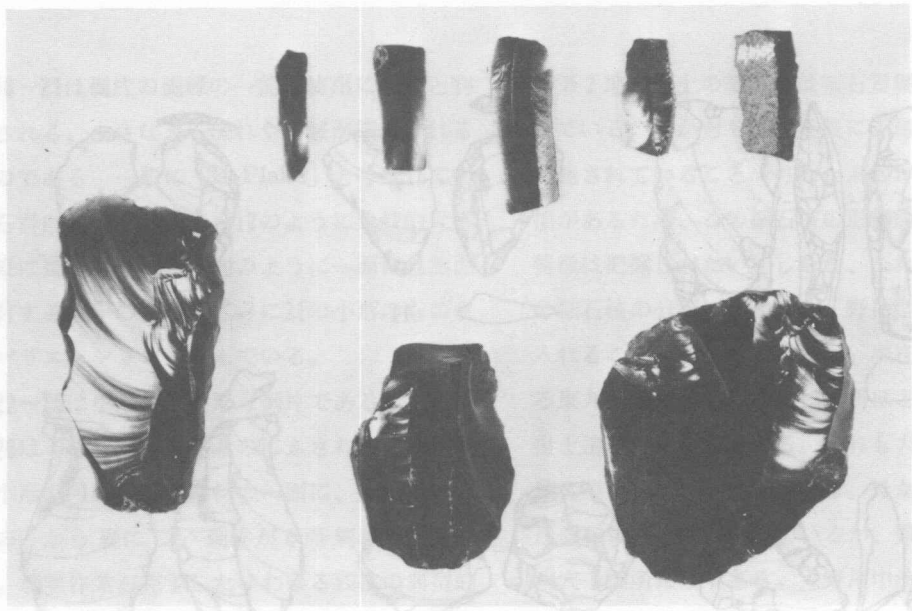
賀川光夫 「大分県聖岳洞穴」 日本の洞穴遺跡 昭和42年

聖岳洞穴で人骨調査を担当されていた新潟大学小片保教授が本年（昭和55年）1月急死された。聖岳洞穴出土の石器を執筆するにあたって、先生のご冥福を心よりお祈りしたい。



第3図 聖岳洞穴出土の石器 (台形様石器・二次加工の剥片・使用痕の剥片・他)

聖岳洞穴出土の
石器



細石刃 (拡大)

